

【 復活のトロパリ 第6調 】

てんしのぐんなんぢのはかにあらわれしに、
 天使 軍 爾 墓 現

ばんぺいしせしもののごとし、マリアはか
 番兵 死 者 如 し、マリアは墓

にたちて、なんぢのいさぎよきからだをたづね
 立 爾 潔 體 尋

たあり。なんぢはぢごくにいざなわれず
 爾 地獄 誘

して、ぢごくをとりこにし、いのちをた賜
 地獄 虞 生 命 賜

もうものとして、しよぢよにあいたまえり。
 者 處女 逢 給

しよりふくかつせししゅよ、こうえいは
 死 復 活 主 光 榮

なんぢにきいす。
 爾 歸

【 升天祭のトロパリ 第4調 】

ハリストスわれらのかみよ、なんぢはこうえい
 我 等 神 爾 光 榮

のうちにてんにのぼり、せいしんをつかわす
 中 天 升 聖 神 遣

をやくして、もんとをよろこばしめたまえ
 約 門 徒 喜 給

り、かれらなんぢのしゆくふくによりて、なんぢ
 彼等爾祝福依爾
 がかみのこ、せかいのしゆくざいしゆたるを
 神子世界贖罪主
 たしかめられしによる。
 確因

【 諸聖神父のトロパリ 第8調 】

あがめほめらるるかなハリストスわれらのかみ、
 崇讃哉我等神
 こおみようとてちじょうにわがしよしんぷをた
 光明地上我諸神父立
 て、かれらをもつてわれらしゆうをまこと
 彼等以我等衆眞
 のおしえにみちびきしものや、いたりてじ慈
 教導者至慈
 れんなるしゆよ、こうえいはなんぢにき
 憐主光榮爾んぢにき歸
 す。

【 諸聖神父のコンダック 第8調 】

こうえいはちちとことせいしんにきす。
 光榮父子聖神歸

しょしとのせんでんとしょしんぷのていりとはきょうか
 諸使徒 宣傳 諸神父 定理 教會
 いのたためにゆいいつのおしえをかためたり、
 爲 惟一 教 固
 かくきょうかいはてんじょうのしんがくがおりたる
 斯 教 會 天 上 神 学 織
 しんじつのころもをきて、かみのおしえの
 眞 衣 衣 神 教
 おおいなるおうぎをただしくと き、かつ
 大 奥 義 正 解 且
 さあんえいす。
 讃 榮

【 升天祭のコンダック 第6調 】

いまもいつうもよよに、アミン。
 今 何時 世 世
 ハリストスわれらのかみよ、なんぢはわれらにおけ
 我 等 神 爾 我 等 於
 るていせいをなしおえて、ちのものをてんに
 定 制 爲 畢 地 者 天
 あわせて、こうえいのうちにのぼりた
 合 光 榮 中 升
 れども、いづこよりもはなれざりき、す乃
 何 處 離

なわちわかるるなくとどまりて、なんぢ
 別 留 爾
 をあいするものによぶ、われなんぢらとと
 愛 者 呼 我 爾 等
 もにす、ひとのなんぢらにてきする
 人 爾 等 敵
 なあし

司祭) (黙誦：聖なる神、聖者の中に息い、セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、悉くの天軍より伏拝せられ、萬物を無より有と
 なし、人を爾の像と肖とに依りて造り、爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、罪を行ふ者を棄てずして、其救の爲に痛悔
 を立て、我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、此の時に於ても、爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主宰よ、爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、爾の仁慈を
 以て我等に臨み、我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、我が靈と體と
 を聖にし、我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、爾は聖なり、我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、今も何時も世世
 に、

アミン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅 、 聖 なる

じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 の 者 我 等 を 憐

よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅 、 聖

な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ
 常 生 の 者 我 等 を 憐

め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、
 聖 なる 神 、 聖 なる 勇 毅

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 なる 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 こ う え い は ち ち と こ と せ い し ん
 れ め よ 。 光 榮 は 父 と 子 聖 神

に き す 、 い ま も い つ も よ よ に 、 ア ミ ン。
 歸 今 も 何 時 世 世 に 、 ア ミ ン。

せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を あ わ
 聖 なる 常 生 の 者 我 等 を 憐

れ め よ 。 せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う
 れ め よ 。 聖 なる 神 、 聖 なる 勇

き 毅 、 せ い な る じょう せ い の も の よ 、 わ れ ら を
 毅 、 聖 なる 常 生 の 者 我 等 を



あわれめよ。
憐

司祭) (黙誦：主しゅの名なに依よりて來きたる者ものは崇あがめ讃ほめらる、へルヴィムぎに座ものする者なんぢよ、爾そのくには其國
の光こう榮えいの寶座ほうざに在ありて恒つねに崇あがめ讃ほめらる、今いまも何いつ時よも世よ世よに、)

【 提綱に代えて諸祖の歌 第4調 】

司祭) 慎つつしみて聽きくべし、衆しゅうじん人へいあんに平安、

誦經) 爾なんぢの神しんにも、

司祭) 睿えいち智、

誦經) プロキメン、主しゅ我わが先せん祖ぞの神かみよ、爾なんぢは讃さん揚ようせられ、爾なんぢの名なは世よ世よに讃さん美び讃さん榮えいせら
る、



誦經) 蓋けだ爾なんぢは凡およそ我われ等らに行おこないし事ことに於おいて義ぎなり



誦經) ^{しゅわ せんぞ かみ なんぢ さんよう} 主我が先祖の神よ、爾は讚揚せられ、

Musical notation with lyrics:
なんぢのな は よよ に さんびさんえい せえら る 。
爾 名 世 世 讚 美 讚 榮

【 アポストロス 使徒經 44 端 聖使徒行實 20 章 16 節～18 節、28 節～36 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{せいしとこうじつ よみ} 聖使徒行實の讀、

司祭) ^{つつし き} 謹みて聽くべし、

誦經) ^{か ひ しゅうこう す さだ ひさ とど ため} 彼の日パヴェルは 舟 行して、エフェスを過ぎんと 定めたり、アジアに久しく 留まらざらん爲なり、
^{かれよく ごじゆんせつ ひ あ ほつ くれ} 彼能すべくば、五 旬 節の日にイエルサリムに在らんと 欲したればなり。彼はミルトより
^{ひと つかわ きょうかい ちようろうら め くれら きた とし これ い なんぢ} エフェスに人を 遣 して、教 會の 長 老等を召したり。彼等が 來りし時、之に謂えり、爾
^{らみづか つつし またぜんぐん つつし すなわちせいしんなんぢら そのうち た かんとく な しゅかみ} 等自ら 慎み、亦全 群を 慎め、乃 聖神 爾等を其中に立てて、監 督と爲し、主 神
^{おのれ ち もつ え きょうかい ぼく けだしわれし わ さ のち ざんにん おおかみ むれ} が己の血を以て獲たる 教 會を牧せしむ。蓋 我知る、我が去りし後、殘 忍なる 狼、群
^{おし もの なんぢら うち い なんぢら うち ひとびとおこ もんと いざな おのれ} を惜まざる者は、爾 等の中に入らん、爾 等の中よりも人 人 起りて、門徒を 誘い、己
^{したが ため り もと こと かた ゆえ けいせい わ さんねんかんちゆうやた なみだ} に 従 わしめん爲に、理に悖る事を語らん。故に 徹 醒して、我が三年間 晝 夜斷えず、涙
^{もつ なんぢらかくじん おし おも けいてい いまわれなんぢら かみおよ そのおんちよう ことば} を以て 爾 等各人を 誨えしを憶え。兄 弟よ、今我 爾等を神及び其 恩 寵の言、
^{なんぢら た なんぢら およそ せい もの うち しぎょう あた よく もの たく ひと} 爾 等を建て、爾 等に 凡 の聖せられし者の中に 嗣 業を 與うるを能する者に託す。人
^{きんぎんいふく われいま これ むさば なんぢらみづか し こ わ て われおよ われ とも} の金 銀衣服は、我未だ之を 貪らざりき。爾 等 自ら知る、此の我が手は我 及び我と 偕
^{あ もの もとめ きょう およそ こと おい われなんぢら か ろう よわきもの たす かつ} に在りし者の 需 に 供 せしを。凡 の事に於て我 爾 等に 斯く 勞して、柔 弱者を 扶 け、且
^{しゅ ことば おも べ しめ けだしかれみづか い あた う さら} 主 イイスの 言 を 憶う可きを 示 せり、蓋 彼 自ら云えり、與うるは 受くるよりも 更に
^{さいわい い おわ くれひざ かが しゅう とも いの} 福 なりと。言い 竟りて、彼 膝を 屈めて、衆 と 偕に 禱 れり。

(比較用 口語訳) それは、パウロがアジアで時間をとられないため、エペソには寄らないで続航することに決めていたからである。彼は、できればペンテコステの日には、エルサレムに着いていたかったので、旅を急いだわけである。そこでパウロは、ミルトからエペソに使をやって、教会の長老たちを呼び寄せた。そして、彼のところに寄り集まってきた時、彼らに言った。「わたしが、アジアの地に足を

踏み入れた最初の日以来、いつもあなたがたとどんなふうにご過ごしてきたか、よくご存じである。どうか、あなたがた自身に気をつけ、また、すべての群れに気をくばっていただきたい。聖霊は、神が御子の血であがない取られた神の教会を牧させるために、あなたがたをその群れの監督者にお立てになったのである。わたしが去った後、狂暴なおおかみが、あなたがたの中にはいり込んで来て、容赦なく群れを荒すようになることを、わたしは知っている。また、あなたがた自身の中からも、いろいろ曲ったことを言って、弟子たちを自分の方に、ひっぱり込もうとする者らが起るであろう。だから、目をさましていなさい。そして、わたしが三年の間、夜も昼も涙をもって、あなたがたひとりびとりを絶えずさとしてきたことを、忘れないでほしい。今わたしは、主とその恵みの言とに、あなたがたをゆだねる。御言には、あなたがたの徳をたて、聖別されたすべての人々と共に、御国をつがせる力がある。わたしは、人の金や銀や衣服をほしがったことはない。あなたがた自身が知っているとおおり、わたしのこの両手は、自分の生活のためにも、また一緒にいた人たちのためにも、働いてきたのだ。わたしは、あなたがたもこのように働いて、弱い者を助けなければならないこと、また『受けるよりは与える方が、さいわいである』と言われた主イエスの言葉を記憶しているべきことを、万事について教え示したのである」。こう言って、パウロは一同と共にひざまずいて祈った。

【 アリルイヤ 主日第1調 】

司祭) ^{なんぢ へいあん} 爾に平安、

誦經) ^{なんぢ しん} 爾の神にも、

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) アリルイヤ、

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

誦經) ^{しよしん かみしゅ ことば いだ ち め ひ い ところ ひ い ところ いた} 諸神の神主は言を出して地を召す、日の出づる處より日の入る處に至る。

アリル イ ヤ 、 アリル イ ヤ 、

ア リル イ ヤ 。

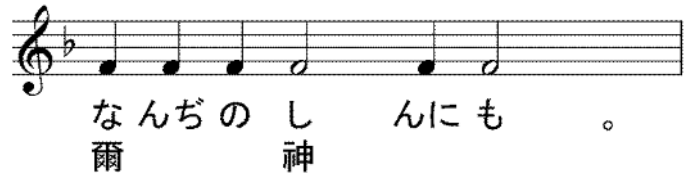
誦經) ^{われ せいしや まつり もつ われ やく むす もの わ まえ あつ} 我の聖者、祭を以て我と約を結びし者を我が前に集めよ。



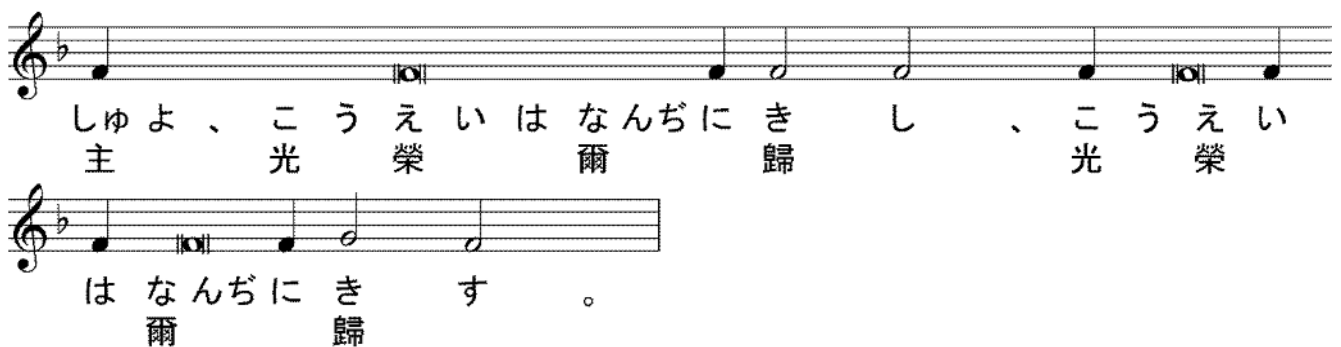
司祭) (黙誦: 人を愛する主宰よ、我が心に神を知る智慧の浄き光を輝かし、我が思念
 の目を啓きて、爾が福音の教を悟らしめ給え、我が衷に爾の福たる誠を
 畏るる畏をも入れて、我等が悉くの肉體の慾を踏み、凡そ爾の喜ぶ所
 を思い且つ行いて、属神の生活を過ぐるを致させ給え、蓋ハリストス神よ、
 爾は我が靈と體との光照なり、我等爾と爾の無原の父と至聖至善にし
 て生命を施す爾の神とに光榮を獻ず、今も何時も世々に、アミン。)

【 エヴァンゲリオン 福音經 イオアン福音書56端 17章1~13節 】

司祭) 睿智、肅みて立て聖福音經を聴くべし、衆人に平安、



司祭) イオアン傳の聖福音經の讀、



司祭) 謹みて聴くべし、彼の時イイス其目を天に擧げて曰えり、父よ、時至れり、爾の子
 を榮せよ、爾の子も爾を榮せん爲なり、蓋爾は彼に凡の肉體の上の權を與え
 たり、彼が凡そ爾の彼に與えし者に永遠の生命を與えん爲なり。永遠の生命とは、
 即爾、獨一の眞の神、及び爾が遣ししイイスハリストスを知ることは是なり。

われすで なんぢ ち えい なんぢ われ あた おこな わざ な いまなんぢちち われ
我 已に 爾 を地に 榮し、 爾 が我に 與えて 行 わしむる 事 を成せり。 今 爾 父よ、 我を

して 爾 に在りて 榮 を享けしめよ、 卽 創 世の 先に 我が 爾 に在りて 有ちたる 榮なり。

なんぢ よ うち われ あた ひとひと われなんぢ な あらわ かれら なんぢ ぞく なんぢかれ
爾 が世の中より 我に 與えし 人 人に、 我 爾 の名を 顯 せり、 彼等は 爾 に屬し、 爾 彼

ら われ あた かれらなんぢ ことば まも いまかれら およ なんぢ われ あた もの みな
等を 我に 與えたり、 彼等 爾 の 言 を守れり。 今 彼等は 凡そ 爾 が我に 與えし者、 皆

なんぢ し けだしわれ なんぢ われ あた ことば かれら あた かれらこれ う
爾 よりするを 知れり、 蓋 我は 爾 が我に 與えし 言 を彼等に 與えたり、 彼等之を受け、

かつわれ なんぢ い まこと し またなんぢ われ つかわ しん われ かれら ため
且 我が 爾 より出でしを 誠 に知り、 亦 爾 が我を 遣 ししを 信ぜり。 我は 彼等の 爲に

いの よ ため いの すなわちなんぢ われ あた もの ため けだしかれら なんぢ ぞく およ
祈る、 世の 爲に 祈らず、 乃 爾 が我に 與えし 者の 爲なり、 蓋 彼等は 爾 に屬す。 凡

われ ぞく もの なんぢ ぞく なんぢ ぞく もの われ ぞく われ かれら うち えい
そ 我に 屬する 者は 爾 に屬し、 爾 に屬する 者は 我に 屬す。 我は 彼等の中に 榮せられ

われ これ よ あ かれら よ あ われなんぢ ゆ せい ちち なんぢ われ あた
たり。 我は 是より 世に 在らず、 彼等は 世に 在り、 我 爾 に往く、 聖なる 父よ、 爾 が我に 與

もの なんぢ な よ これ まも かれら われら ごど いつ な われかれら とも
えし 者は、 爾 の名に 因りて 之を 守りて、 彼等を 我等の 如く 一と 爲らしめよ。 我 彼等と 偕

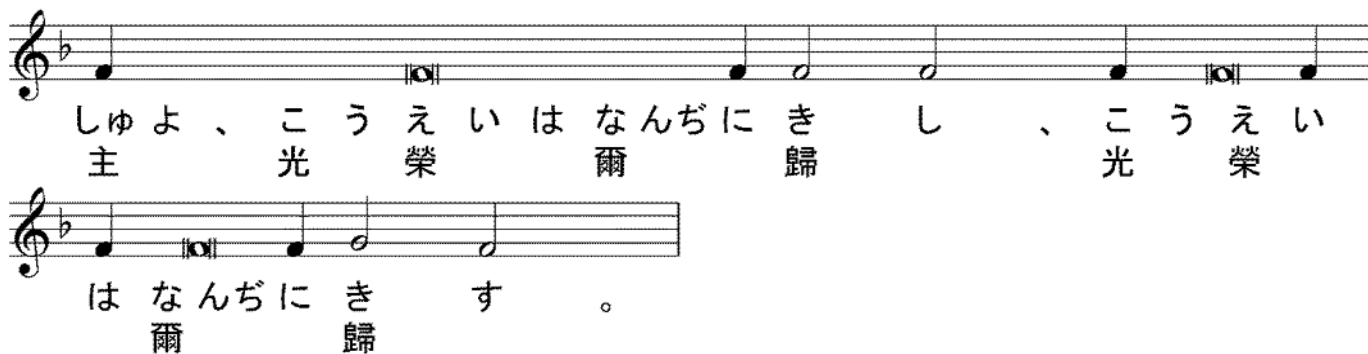
よ あ とき なんぢ な よ かれら まも なんぢ われ あた もの われこれ まも
に 世に 在りし 時、 爾 の名に 因りて 彼等を 守れり、 爾 が我に 與えし 者は、 我 之を 守り、

そのうちひとり ほろ ただちんりん こ ほろ せいしよ かな いた いまわれなんぢ ゆ われ
其 中 一 も 亡びず、 惟 沈 淪 の子は 亡びたり、 聖 書 の 應う を致す。 今 我 爾 に往く、 我

よ あ これ い かれら おのれ うち われ まつた よろこび たも ため
世に 在りて 之を 言う、 彼等が 己 の内に 我の 全 き 喜 を 有たん 爲なり。

(比較用 口語訳) これらのことを語り終えると、イエスは天を見あげて言われた、「父よ、時がきました。あなたの子があなたの栄光をあらわすように、子の栄光をあらわして下さい。あなたは、子に賜わったすべての者に、永遠の命を授けさせるため、万民を支配する権威を子にお与えになったのですから。永遠の命とは、唯一の、まことの神でいますあなたと、また、あなたがつかわされたイエス・キリストとを知ることです。わたしは、わたしにさせるためにお授けになったわざをなし遂げて、地上であなたの栄光をあらわしました。父よ、世が造られる前に、わたしがみそばで持っていた栄光で、今み前にわたしを輝かせて下さい。わたしは、あなたが世から選んでわたしに賜わった人々に、み名をあらわしました。彼らはあなたのものでありましたが、わたしに下さいました。そして、彼らはあなたの言葉を守りました。いま彼らは、わたしに賜わったものはすべて、あなたから出たものであることを知りました。なぜなら、わたしはあなたからいただいた言葉を彼らに与え、そして彼らはそれを受け、わたしがあなたから出たものであることをほんとうに知り、また、あなたがわたしをつかわされたことを信じるに至ったからです。わたしは彼らのためにお願いします。わたしがお願いするのは、この世のためにではなく、あなたがわたしに賜わった者たちのためです。彼らはあなたのものであるのです。わたしのものは皆あなたのもので、あなたのものでわたしのものです。そして、わたしは彼らによって栄光を受けました。わたしはもうこの世にはいなくなりますが、彼らはこの世に残っており、わたしはみもとに参ります。聖なる父よ、わたしに賜わった御名によって彼らを守って下さい。それはわたしたちが一つであるように、彼らも一つになるためです。わたしが彼らと一緒にいた間は、あなたからいただいた御名によって彼らを守り、また保護してまいりました。彼らのうち、だれも滅びず、ただ滅びの子だけが滅びました。それは聖書が成就するためでした。今わたしはみもとに参ります。そして世にいる

間にこれらのことを語るのは、わたしの喜びが彼らのうちに満ちあふれるためであります。



しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
主 光 榮 爾 歸 光 榮

はなんぢにきす。
爾 歸

※聖体礼儀③（金ロイオアン聖体礼儀）へ